

M f o r M a s q u e r a d e

トラック6 逃れられない甘み

(SE：ベッドが軋む音)

(目覚める)

(SE：少し離れたところから近づく足音)

咲 「あら、目が覚めたんですか、先輩。

具合はどうですか？ふふ、それは良かった。

ここですか？なるほど。記憶が混乱してますね？

私が運んで来たんですよ。ここに。

そう言えば、初めてですね？私の部屋。

ここに入って来られた男は、先輩が初めてなんです。

どうですか？嬉しいですか？私は嬉しいですよ。ふふ。

ふうん、拉致って……そんな言い方はちょっと悲しいですね。

先輩に怪我させず、ここまで運んで来るのは大変だったんですよ？

だって先輩、私を裏切ろうとしたじゃないですか。

まさか気付かないと思ってました？甘いですね。

自分のオモチャが何を考えてるか、気付かない主人がいるとでも？

それなりに慎重な動きでしたけど、お見通しなんですよ。

前では普段通りの良い子ぶりで、後ろでは仲間に知らせる。そんな浅はかな策、

通じるとでも思いました？本当、ウブですね。それともただの間抜けなのかな。

ウブな子は可愛いと言われますけど、まあ、確かに可愛いですね、先輩は。

噛み砕きたくなる程……ふふふ。

何ですか、その顔は。

私ですよ？愛しい後輩であり、あなたの飼い主。そしてこれからの人生をかけて
崇拝すべき女神。

月見里咲なんですよ。ふふふ。

もう怖がらないでくださいな。

折角の雰囲気台無しじゃないですか。

あら、眉をしかめたりして。

怒ってるんですか？それもまた可愛い。

助けが来る……？ふふ、無駄な期待を。言ったでしょう？全てお見通しだと。

先輩がコンタクトした仲間はもう、彼女達が隠密に処理したんですよ。

今頃、誰かに敷かれて快楽に溺れてるのでしょうかね。

心底屈服しない限り、逃れることもありません。

ああ、そうなったら自分の意思で抜け出すことなんて無い筈ですし、もう会うことも無いでしょう。

素敵な結末じゃないですか。

顔が真っ青になりましたね。私があなを殺めるとでもお思いですか？

心配しないでくださいな。私は今猶あなたが好きなんです。愛していますよ？

違う？そんなの、愛じゃない？

私の愛を否定するのですか。傷付きます。

そんな悪い人には、こう……！」

(SE：ベッドが軋む音)

(キス)

咲 「エッチなお仕置きを致しますよ。

ふふ。キスだけで目がとろけてますね。

一気に抵抗の意思が挫けたでしょう？当然です。

あなたを調教したのはこの私です。

おちんちんも堅く勃起しちゃって……もうやる気満々ですね？」

(SE：手コキ：普通の早さ)

咲 「エッチなことさえしてあげれば、こんなにも従順なのに。

何を血迷ったんでしょう。私を与える快樂にご不満でした？

悉くタマの精液を絞り出してあげてるのに。

何が問題なんでしょうね、先輩。」

咲 「ふふ。何も言わないんですね。いや、言えないのかな。

良いんですよ。そのままじっとしててください。

本当は、知っています。

何故そんな白々しい策で私を裏切ろうとしたのか……。」

咲 「私から確信を得たかったんですね？

それに、弄られたかった……そうでしょう？

ごめんなさい。先輩のことは知っていたつもりで、ちょっと得意になってたみたい。

それが、先輩を不安にしたんですね。

あと、真性のマゾである先輩のことです。優しくしてたのが寧ろ苦しみになっちゃったんでしょう。

先輩のこと、愛でてるつもりで、本当は苦しめたとは。明らかに私のミスです。

ご安心くださいな。ミスは一度切りで充分です。

もうそんなことは無いんです。誓いましょう。

咲は、あなたの望む気持ち良さ、あなたの求める快樂だけを与えます。

責任をもって、あなたが私以外のことを考えなくて良いように、最善を尽くして面倒を見ます。

それが私の望みで、あなたの望み。

今に至るまでは、本当に長かった。

でも無意味じゃなかった。

二人きりの秘密が沢山出来たんですから。」

(SE：手コキ：早く)

咲 「ああ、可愛い先輩……。

はい。あなたの咲はすぐ傍にいますよ。

もっと私の名前を呼んで。

もっと焦れたく、もっと愛おしく。

もっと乱れた声で……！

感じてますか？

おちんちに絡んで、上下に優しく撫でる私の手が……。

軽くカリ首を回しながら、裏筋を包む動きが。

敏感で弱いおちんちん、特にここが弱いんですね。

知ってますよ。もう何度も先輩を弄ってきたんですから。」

(SE 止める)

咲 「あら、手が止まっちゃった。

どうしたんでしょう？

ふふ。そんなに切ない顔、しないでください。

もうちょっとでイきそうだったでしょう？

だからですよ。

す・ん・ど・め。

これが欲しかったんでしょう？先輩。

真性のマゾのあなたが欲しがってたもの。

焦らして焦らして溜まった快楽が最後の一瞬に噴出される……。

それこそ、理性を飛ばす程に興奮する、未知の絶頂が経験したいんですよね？」

(SE：手コキ：普通の早さ)

咲 「その願い、咲が叶えてあげます。

先輩は何も考えなくて良いんです。

いつものように、私に身を委ねて。

苦しかったんでしょう？

他人に求められる自分を演じること。

誰にも親切な、素敵な先輩。

皆の期待に応えること、辛かったんでしょう？

本心を抑えながら、傷付き続けること……。

堪えて、堪えて、心が痛かったんでしょう？

ですから、そんなことなんか。」

咲 「気持ち良くなりたい先輩を邪魔する、どうしても良いことなんて、捨てましょう？

難しくないんです。

最初だけが、ちょっと難しいだけ。

怖いんですか？

これから変わる自分のことが？

大丈夫。私を信じて。

空いたところは私が満たします。

先輩のことが大好きな、私の心で。

誰かに求められるって感じた瞬間、得られる幸せ。

それを、味わわせてあげます。」

咲 「ふふ。先からおちんちんがピクピクしていますね。

先輩って、本当に敏感だなあ。

覚えてますか？以前、私の許可無しにイっちゃってお仕置きされたこと。

あの時の先輩って、相当無様だったんです。

快楽に溺れて、我慢しようともせず、そのままびゅびゅびゅと……。

先輩の精神力って、その程度なんですか？

違いますよね？私の愛する人なんですもの。

その程度な訳、ないんです。

私の欲望を全て受け容れなければ。

その程度の精神力でしたら、遠からず、私に浸食されますよ？

ああ、先輩。その表情、良いですね。本当に良い……。

やっぱり、先輩も私のこと、好きなんですね。

はい。私の為に、頑張ってください。」

(SE：手コキ：早く)

咲 「この程度の早さなら、我慢出来ますね？

幾ら私の手が気持ち良くたって、これ位、余裕、余裕。

そうでしょう？もう何度もこの手でいっちゃってるんだし。

そろそろ慣れる頃合いじゃないですか。

例えば、こうやって逆さまに握って、亀頭を詰めるように回しても……。

うん？何ですか、その呻き声。まさか、撫で方を少し変えただけでいきそうなんですか？

先輩ったら、進展しないんですね。

良いんです。謝ることはありません。

それもまた、先輩なんですから。

先輩の面倒なら、幾らでも見てあげます。

はい。先輩は私のものなんですから、それ位、どうってことはありません。

あら、私の言葉が嬉しいんでしょうか。腰が勝手に動いていますよ？

これじゃ、困るかな……。」

(SE 止まる)

咲 「なので、ストップ。

はい。またストップです。

寸止め、気持ち良くありませんか？

先輩、苦しそうな顔ですよ。ふふ。

でも、分かるんでしょう？

それが気持ち良いと言うこと。

ところで……ずっと手で撫でていたら、腕が疲れました。

何か他の方法は……。

あ、ふふ……。良いこと思い付きました。

そろそろ頃合いですし、良いでしょう。

先輩のおちんちはまだ頼りないんですけど、それは置いといて……。」

(SE：念力で浮かべる)

咲 「ふふ。怖がらないでください。と言っても無理ですよ。

どうですか？宙に浮かぶ感覚は。

不思議ですね。以前の私だったら、幾ら超能力を持っても、人を浮かばせるのは無理だったのに……。

これもまた、彼女達、スカーレット・ウィッチーズのお陰ですよ。

さて、と……。」

(咲、ベッドに横たわる) (SE：ベッドの軋む音)

咲 「これから何をするのか、気になりますか？

考えてみてください。

ベッドで横になってる私と……宙に浮かんでいる先輩。

この状況が何を意味するのか……。」

(SE：指を鳴らす)

咲 「先輩はこれから、私とセックスをするのです。

勿論、私の意思ですよ。ふふ。」

(SE：挿入)

咲 「ああん……入ってきましたよ。先輩の、頼りないダメちんちんが私の中に……。

これで先輩は童貞じゃなくなりましたね。あ、でも自分で動いた訳じゃないし、まだ童貞なののでしょうか。ふふ……ご自由に受け取ってください。私は私なりに受け入れますので。」

(SE：正常位：ゆっくり)

咲 「ん……。動きはこの位で良いでしょうね。

初めてなので、ちょっとコントロールが難しいんですけど……。まあ、いずれ慣

れます。

気持ち良いんですか、先輩？

これこそ、先輩が今まで求めていた……女と男が共に気持ち良くなる、セックスなんです。

手や太ももなんか、比べものになりませんよね？

ああ、先輩の表情……今までで最も乱れてます。

涙まで……。そんなに嬉しいんですか？ふふ。

では、ここで面白いことを教えてあげます。

さあ、右の方を見てください。」

(SE：カメラのレンズ音)

咲 「そう。今私達の行為は全て録画されてます。

どうして？そりゃ……万が一の為ですよ。ふふ。

例えば、こんなのも出来るんですよ？

(レイプを演技) 先輩！やめて！

先輩のこと、慕っていたのに……どうして、こんなこと……！ああ……っ！

なーんてね。どうでした？私の演技。

ふふふ。冗談ですよ。冗談。

人に見せようとはこれっぽっちも考えてないんですから。

あくまでも、先輩と私の思い出造りの一環なんです。

安心しました？

私を裏切らない限り、先輩を困らせたりはしませんから。

さて、そろそろコントロールにも慣れましたし、もうちょっと、早くしますね。」

(SE：正常位：普通の早さ)

咲 「刺激が強まる程、堪えるのも大変でしょうけど、勝手にイっちゃったりしてはいけませんよ……？

これも先輩の為なんです。それに、先輩の私を思う気持ちも知りたい……わかり

ました？

ふふ。はい。頑張ってください。

私も先輩が不安がらないように、頑張りますよ。」

咲 (FX: テレパシー) 「聞こえますか？先輩の頭に響く私の心の声……。

少しずつ、先輩を私で染めてあげます。

もう苛立ちも、不安も、感じられないように……。

私で頭と心を満たして……。

私無しでは生きていけない体にして差し上げます。

そうすれば、先輩は永遠に私のもの……。

一生一緒になれますよ。

私の心は、最初からあなたのモノでしたから。

さあ、先輩。今までの自分は忘れて。

先輩はこれから私の為に……。

そしてスカーレット・ウィッチーズの為に働くのです。

私の忠実な奴隷として、ヒーローどもを内側から壊して行くのです。

あ、勿論殺したりはしません。男不足ですから。勿体無いこと、する訳が無い。

気に入らないんですけど、彼等の遺伝子は優秀ですから。

上手く調教して……私達のペットにします。

きっと素晴らしい子孫が生まれるんでしょうね。

先輩もそう思いますよね？

背徳感の奴隷になった、今の先輩にとって、堪えられない程、魅力

的な話じゃないですか？

考えてみてください。ただ生まれ付きの力があるだけなのに、自分達をサポート

している先輩をバカにした、あのヒーローども。

先輩と私の力で陵辱し、最後には屈服させ、服従させるのですよ。

想像しただけで心躍る話ではないですか？ふふ。

はい、勿論です。

あの者達を私達の前で跪かせて、泣きすがらせること位、どうってことないんですよ。

どうですか？私の考え。

流石、先輩。話が通じますね。

そうですよ。ここを私達二人の力で潰して、スカーレット・ウィッチーズのアジトにするのです。

少しずつ、ゆっくりと、そして、一瞬に。」

(SE：正常位：早く)

咲 「さて、お話はここまでにしましょうか。

良く堪えてくださいました、先輩。

この前とは違いますね。嬉しいです。

偉い、偉い。

では、お約束の快楽。ご褒美の時間です。

初めて女の子とセックスをするだけで幸せな先輩に、果たしてどのようなご褒美があるんでしょう？気になりますか？

その割には目が霞んでいますね。まあ、私がそうしたんですけど。ふふ。

『な・か・だ・し』。

驚きました？

初のセックスに、中出しまで……。

先輩としては、身に余るご褒美じゃないですか？ふふ。

まあ、拒みたければ拒んで良いですよ。

あくまでも……私の念力から離れたらの話ですけど。

私は先輩の子種が欲しいんですから。

ですから、我慢しないで、先輩の子種、私の子宮にびゅびゅっと出してください。

きっと、この上なく幸せな筈ですよ？」

(SE：射精)

咲 「ふう、先輩のタマに満ちてた精液が、子種が私の中に注がれてますよ。
初めての感覚ですけど、悪くないですね。
さあ……もっと絞り出してあげますから、一滴残らず私の中に注いでください。
ふふふ。幸せ者ですよ、先輩は……。
あら、疲れたようですね。」

(SE：指を鳴らす)

咲 「さあ、何も考えないで、私の懷でお眠りください。
これから、忙しくなりますから。
ふふふ……。
これで、先輩は私から絶対、離れられません。
私の体のあっちこっちに先輩の痕跡が残った……。
先輩は、私の手の平の中なんです。
体も、心も……。
ですから、今は眠りなさい。
私のからくり人形さん。
ふふふ……。」